

アメリカ葬儀業界誌 『キャスケット・アンド・サニーサイド』の研究

——その誕生と時代的背景——

黒 沢 眞里子*

はじめに

『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌 (*Casket and Sunnyside*) は、アメリカで最も初期の葬儀業界誌の1つである¹⁾。1876年に『キャスケット』(*The Casket*) 誌として創刊され、1925年に『サニーサイド』(*The Sunnyside*) 誌と合体して、『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌となり、1988年まで刊行が継続された。そのおよそ110年間、葬儀業は必要に応じてモノ、サービスを提供する兼業的な仕事から、それらを常時提供する専門業者へと大きく変貌した。葬儀業界が社会のなかの「見えない」存在から、20世紀の巨大葬儀産業へと発展する軌跡をもっともよく伝えるのが『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌である。それぞれの時代にどのようなことが議論され、どのようなことが葬儀業者の関心事であったのか知ることのできるきわめて貴重な情報源となっている。アメリカ人の死生観や葬儀業界について書かれた著作、論文の多くは、その情報を本誌から得ている。しかしながら、本雑誌自体を取り上げ、雑誌の成立過程や、内容、文化的意味などを論じた研究は見当たらない。その成立過程などが

*専修大学文学部教授

やや詳しく述べられているものとして1955年に出版された『アメリカの葬儀史』がある。共著者の社会学者ロバート・W・ハーベンスタインは創刊号からかなり詳しく読み込んでおり、初期葬儀業界誌が葬儀業者の組織化、プロフェッショナル化で果たした役割について興味深い分析を行っている²⁾。

情報源としての価値に加え、『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌自体を文化研究の対象としてとらえると、興味深い研究の可能性が示唆される。ハーベンスタインの社会学的分析のなかにも示唆に富むコメントがあり、それを言葉・図像の分析も含めた文化研究へと発展させられないかと筆者は考えた。これまでそのようなアプローチがとられてこなかった理由は、業界誌のような^{エフェメラル}一過性資料をアカデミックな研究対象として扱うような環境が十分整っていなかったこと、初期の雑誌を創刊から継続して閲覧できる場所がきわめて限られていることなどが考えられる³⁾。

アメリカ人の死生観、墓地の歴史を研究する筆者は、『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌の重要性に着目し、収集に努めてきたが、平成20年度専修大学研究助成により、広範囲の時代に渡って雑誌を入手することができた。とくに、入手のもっとも困難な19世紀に刊行された『キャスケット』誌を14冊入手できた。このような稀な購入機会を得て、現在専修大学の研究室で所蔵する葬儀関連雑誌が、1870年代から1960年代まで100冊を越え、本学教員、学生はもとより、アメリカの葬儀に関心のある一般の人々の利用に供する為に、ウェブ上で表紙と目次を閲覧できるように整理することをまず行った⁴⁾。次の段階は、これらの一次資料からどのような研究の可能性が引き出せるか、資料の分析を行うことである。当時の死生観や葬儀事情だけでなく、大衆消費社会やライフスタイルとの関連で、興味深い考察が期待できるはずである。

本論はその最初の試みとして、葬儀業界誌が誰によって、どこで、どのような目的で創刊されたのか、その誕生と時代的背景を明らかにしたい。

とくに雑誌のタイトルやデザインに注目して、言葉と図像の分析を行うことにより、葬儀業界ばかりでなく、より大きなアメリカ文化の中の葬儀雑誌の意義、役割について考察する。

最初の業界誌『アンダーテイカー』，簡にして要を得た誌名

アメリカで最初の葬儀業界誌は、1871年10月にニューヨーク市で創刊された『アンダーテイカー』誌 (*The Undertaker*) である。アンダーテイカーは当時、葬儀に関わる人を指す一般的な言葉だったので、何の気取りもない、単刀直入の命名である。若干4頁の書面だけの簡素なものだったが、発行の動機として次のように述べられている。「現在、新聞があまねく人々に行き渡っている時代に・・・葬儀ビジネスの関心を代表するような定期刊行物が今までなかったことは不思議である。」⁵⁾

これを発行したのは、ニューヨークの葬儀用品製造業者、ヘンリー・E・テイラー (Henry E. Taylor) である。葬儀関係者が自ら編集者となって始めたわけである。彼が棺の製造販売に関わっていたことは示唆的である。そもそも棺は当時巡回セールスマンを介して販売されていたのだが、彼らはきわめて広範囲な地域を回っていた。業界誌に寄せられた「棺セールスマンの歌」(*The Song of the Coffin Drummer*) は次のように歌っている。

From Illinois, Iowa
Nebraska and Dakota,
To Michigan, Wisconsin too,
And lovely Minnesota,
From Lake Superior's Copper mines

Through Hoosier Indiana,
 To Mississippi's cotton field,
 And Low Louisiana,
 I furnish wooden overcoats
 To many an Undertaker ;
 For Banker, beggar, one and all,
 The Butcher and the baker—
 Baker—
 Butcher and the baker⁶⁾.

1886年の『キャスケット』誌に掲載されたこの詩は、「drummer」と呼ばれた巡回セールスマンが、中西部のほとんどの州と、ミシシッピ川を下ってルイジアナ南部まで、広い地域を巡回していたことを伝えている。彼らは葬儀屋アンダーテイカーに棺おけ（wooden coat は、棺のこと）を販売するだけでなく、さまざまな情報も運んでいた。業界誌ができる前は、このような巡回セールスマンが葬儀業界の有益な情報を伝える媒体であった。『キャスケット』誌にやや遅れ1880年に創刊された『シュラウド』（*The Shroud*, 埋葬布の意味）は、このような棺のセールスマン、リチャード・マクゴワン（Richard McGowan）が始めた業界誌であった⁷⁾。『シュラウド』は『キャスケット』とともに、1884年に、アメリカン・フューネラル・ディレクターズ・ナショナル・アソシエーションの公式機関誌に選ばれている。しかし、その2年後の1886年には廃刊となり短命であった⁸⁾。

次はサニーサイド、名は体を表わさず？

前節で紹介した『アンダーテイカー』誌は、翌年には誌名を『サニーサ

イド』に変更した。本来、日陰の存在である葬儀業を、あえて日の当たる側とすることは、唐突で、ジョークのように聞こえる。なぜ、このような名前にしたのか、発行人で編集者のテイラーは次のように述べている。

葬儀屋と言えば、黒尽くめで、暗い表情をして、厳かな雰囲気を漂わせ、小声で話す人間が頭に浮かぶだろう。しかし、我々が知っている葬儀屋は、家族もいる明るい男で、スポーツ万能、勉強熱心な法律家、慈善家、芸術愛好家でもある。彼は人生の日陰というよりも日向を歩いてきたように思える⁹⁾。

本人はきわめてまじめである。仕事には暗い陰がつきまとも、アンダーテイカーの人生は別であると、明快な主張である。

動機は大いにまじめでも、「サニーサイド」と命名したとたんに、この言葉のもつ力によって編集者の意図をこえた皮肉をもち始めてしまうのも事実だ。実際、初年度の『アンダーテイカー』誌にもこのような言葉の皮肉がすでに潜んでいた。平凡な誌名『アンダーテイカー』の後に「^{グレイヴ}重大な事柄を議論するための月刊誌」と銘打ったサブタイトルがつけられていたからだ。この英語の「grave」という言葉がくせものなのだ。形容詞で使えば「重大な」という意味になるが、名詞は「墓」である。言葉遊びの冗談を言っているように聞こえてしまうのだ。

『アメリカの葬儀史』のなかで、この点に言及した社会学者のハーベンスタインは、これを単に不注意な言葉遣いをしただけかもしれないとしながらも、葬儀業界誌がもつ興味深い傾向についてコメントしている。初期業界誌は、アンダーテイカーの職業がもっている暗いイメージを払拭する為に、冗談や言葉遊び、エピソードなどをとりまぜスパイスを利かせた紙面づくりをしていたというのだ¹⁰⁾。

『アメリカにおける雑誌の歴史』(A History of American Magazines, Vol-

ume III: 1865-1885, 1938) を書いたフランク・ルーサー・モットも、「おかしなことに、主要な葬儀業者のジャーナルは、冗談やエピソードの寄せ集めとして始まった」¹¹⁾とストレートな書き方をしている。これだけ読むと、葬儀業界誌がいかにも不真面目な雑誌として始まったか、間違っただけの印象を受けかねない。ハーベンスタインの方が、資料をよく読み込み、葬儀史の文脈のなかで論じているので、微妙なニュアンスを伝えている。

筆者は、この傾向をハーベンスタインが示唆するような「不注意」(inadvertent) やモットのいう「おかしなこと」(incongruously) とはとらえずに、これは葬儀業界に内在する実態と名称をめぐる根本的問題を反映しているのではないかと考える。葬儀業者を表す言葉の選択の問題も含め——アンダーテイカーにするか、ヒューネラル・ディレクターか、モーティションと呼ぶべきか——葬儀業界は常に言葉の問題に悩まされてきたからだ。その生業の性格（死を扱う）から生じた、実態とそれを表現する言葉の模索が、とくに葬儀産業が誕生し、成長する過程で顕著に現れたと考えるべきだろう。そのような努力は、実態のないものに実態を与える愚かな態度と、とくにイギリス人ジャーナリストのジェシカ・ミットフォード (Jessica Mitford, 1917-1996) などから揶揄されてきた。はたしてそうなのだろうか。このような疑問を念頭に、初期葬儀業界誌をこれから詳しく検討していく。

『キャスケット』誌の誕生

1876年6月に、ニューヨーク州ロチェスターで、アルバート・H・ナードリンガー (Albert H. Nirdlinger, 1845-1884) によって、新たな葬儀業界誌『キャスケット』が発行された。急成長するジャーナリズムの世界で「もっとも新規な企て」と自ら称する雑誌のサブタイトルは、「アンダーテイカーおよび関連業者にとってきわめて重要なすべての問題を公式に扱う月刊誌」であった。その発行動機として、創刊に寄せた挨拶文の中で次のように述べられている。

今日わが国ではアンダーテイカーと考えられている者が6千人以上おり・・・われわれの使命は、皆が購読したくなり、毎号を高い関心をもって心待ちにするような、切れ味が鋭く、生きのいい、面白い業界誌をつくることである¹²⁾。

『アンダーテイカー』誌の出版動機に比べると、よりビジネス志向で、プロフェッショナルな響きがする。葬儀業者にとって「きわめて重要なすべての問題」を扱うという表現も、『サニーサイド』誌のような「grave」を使う「不注意」はなく、英語の「vital importance」という言葉が使われている。

ハーベンスタインは本誌を19世紀中もっとも「尊大な」(pretentious) 葬儀業界誌と紹介している¹³⁾。英語の「pretentious」という言葉は、虚勢を張る、実際よりも大きなことを言うという意味だ。本論では『キャスケット』誌のどのようなところから、「尊大さ」の印象を与えてしまうのか、本誌を詳しく検討していくが、とくに2つの言葉に注目する。1つは、書名にもなっている「キャスケット」(棺の意味) について、2つ目は、上

記の挨拶文中に登場する「セクストン」（教会の墓掘人）という言葉について「アンダーテイカー」と比較しながら考察する。

「キャスケット」、名は体を表す？

まず、書名となった「キャスケット」という言葉をとりあげたい。本来は、宝石など大切なものを入れておく小箱を指す言葉である。1828年のウェブスターの辞書を見ると、それ以外の意味は記載されていない。筆者が研究する田園墓地（1830年代にアメリカで誕生した美しい景観が特徴の墓園）のガイドブックを読むと、キャスケットはすでに棺の意味で使われている。とくに、宝石のように美しく、尊い故人（子供や女性の場合が多い）について書かれた文章や詩の中で、彼らを納めるケースの意味で用いられている。つまり1830年代にはすでに棺を意味する言葉として使われていたことになる。キャスケットは大切なものを入れる箱から転じて、大切な人を入れる棺の意味として使われるようになった。

宝石箱との連想でもう1つキャスケットの重要な特徴は、形態がストレートな長方形ということだ。伝統的なコフィンと呼ばれる棺は、人間の体に合わせて、肩の部分が広がり、足に向かって狭まった縦長の六角形をしている。コフィンとキャスケットは、同じように棺の意味で使われても、イメージされるものが異なっているということだ。1849年のボストンで、コフィンとキャスケットが両方記載されている広告があり、すでにこの時にはこのような形態の違いによって2つの言葉が使い分けられていた可能性が高い¹⁴⁾。

この言葉が葬儀産業のなかで使われる頻度が高くなるのは、1870年代になってからで、正式な特許申請の文書のなかで、遺体収容ケースとして頻繁に登場するようになるのは、さらに時代が下って1890年以降である¹⁵⁾。

『キャスケット』誌が発行されたのは、ちょうど「キャスケット」という言葉が葬儀業界で広く使われるようになり始めた時期だったのである。新鮮な響きのする言葉をタイトルとしたことは、本誌が訴える「もっとも新規な企て」に相応しい試みといえるだろう。

「キャスケット」はアメリカニズム

「新鮮な響き」に加えて、キャスケットという言葉のもう1つのニュアンスに注目したい。それは、先に述べた形態に関するものである。コフィンとは、伝統的な六角形の棺でとくにヨーロッパのものを指し、キャスケットは、アメリカ式のストレートな箱形棺を指すという事実である。現在アメリカでは伝統的なコフィンは使われなくなったが、「キャスケット」も「コフィン」も交換可能な言葉として使われている。それでも「キャスケット」と「コフィン」という言葉は、多くのアメリカ人にとって現代でも形態の違いを想起させるようである¹⁶⁾。ハーベンスタインが『アメリカの葬儀史』を書いた1955年では、ヨーロッパ型のコフィンはアメリカで使われなくなったが、アメリカ型の「キャスケット」がイギリスやヨーロッパで広く普及するまでには至っていないと述べられている¹⁷⁾。

キャスケットは、アメリカ葬儀文化の中で生まれた特有の言葉なのである。1911年の百科事典『ブリタニカ』の「キャスケット」の説明にも、「箱」についての長々とした説明の最後の一行で、「葬儀業者が、とくにアメリカにおいて、「coffin」の大ききな代替語として、頻繁に用いている」と一言述べているだけである¹⁸⁾。『キャスケット』誌は、イギリスから見れば「大ききな」(grandiose) 響きのする、きわめてアメリカ的な命名だったのである。

大ききな身振りにどのような意味があったのか。100年間の『キャスケ

ット・アンド・サニーサイド』誌の軌跡を振り返った1976年の百周年記念号の中に、「この年月はアメリカの葬儀を陰気なものから美的なものへと変貌させたのだ」と総括した文章がある¹⁹⁾。「葬儀」につけられている「アメリカの」という形容詞が気になるのだが、ただ国のことを指しているだけでなく、アメリカ社会・文化にふさわしい葬儀というニュアンスも含んだ言葉として聞こえてくる。『キャスケット』誌の創刊から百年をかけて「アメリカにふさわしい」葬儀が造られたのだという自負さえも、雑誌の名前から聞こえてくるのである。

「キャスケット」は嫌われた言葉でもある

『ブリタニカ』が言う、アメリカの「大げさな」言葉という表現の背後には、婉曲表現を好むアメリカ人を揶揄するニュアンスも読み取れる。20世紀前半に活躍した批評家、H・L・メンケンが、イギリス英語から独自の発展をしたアメリカ英語を論じた『アメリカの言語』を著しているが、その中で、「キャスケット」にも触れている。19世紀アメリカ英語に新たに加わった「キャスケット」を、作家のナサニエル・ホーソーンが嫌っていたとして彼の文章を引用している。

キャスケット！——まったく嫌な現代語だ。ただ埋葬されるだけのことなのに、常識と分別のある人間すらその考えを毛嫌いしてしまうような言葉だ²⁰⁾。

メンケンは、「純粹主義者」(purist)の多くがこの言葉を嫌っているとしてホーソーンをその1人に数えているが、「purist」は、簡素を好むピューリタンのニュアンスも想起させる言葉である。

それはそうとしても、この言葉はホーソーンが1863年に著した「なつかしき故郷」(“Our Old Home” イギリス植民地から見たイギリスのこと)の中で使った言葉である。イギリスのチャペルを訪ねたときに、年老いた「セクストン」(いかにもイギリスらしい)が、その中の棺を説明するのに、ありがたいことにこの年老いた男は「キャスケット」と言わなかったという下りで挿入された言葉なのだ。“Our Old Home”というタイトルにも現れているように、何ともねじれの効いた状況で発せられた言葉だったということは覚えておいてもよいだろう。

さて、メンケン自身はというと、『アメリカの言語』の1921年版で、早くも「キャスケット」について意見を述べている。最近アメリカの新聞が大げさな表現をやめ、シンプルな言葉を使うようになった。これは進歩であり、喜ばしいことで、その例として「キャスケット」やその他の婉曲表現が使われなくなったことをあげている²¹⁾。しかも、イギリスよりさらに先を行き、ニュース記事においては「残念なお知らせですが」というイギリスの前置きすらとってしまい、「昨日ジョン・スミスが死亡した」と簡潔直裁になったという。ここまでくると、これはこれでユーモラスに聞こえてしまうので、言葉の使い方は難しい。

しかしメンケンが、1836年出版の第4版ともなると——先のホーソーンがここに引用されている——状況が大きく変化したことを伝えている。「キャスケット」を嫌っていた人間はいたかもしれないが、1880年以来この言葉はアメリカで急速に普及し、新聞でも、葬儀の広告でも「コフィン」はほとんど使われなくなったという²²⁾。

「セクストン」から「アンダーテイカー」に

もう1つ、『キャスケット』誌の「尊大さ」を修辭的な言葉遣いの中に

見てみたい。創刊の挨拶文の中で、この雑誌の購読者として期待されている6千人を超える「アンダーテイカー」と、教会に属して埋葬関連の仕事を請け負う「セクストン」と比較した次のような言及がある。彼らは、かつての「退屈で目立たない教会の墓堀人 (menial and obscure church-yard sexton)」から、4半世紀あまりで人から認められる (recognized) 存在へと大きく進歩した」という。今その仕事に従事するアンダーテイカーたちは、「財力も、知性も、分別も、洗練さも」あり、「読み、考える」人間たちで、コミュニティ全体から尊敬を得るまでにこの職業を高めたと書かれている。ここでも、注意深く言葉の選択がなされており、「sexton」から「undertaker」への移行は、「見えない存在」、「人から疎んじられる存在」から「見える存在」、「人から評価される存在」へと内実も変化したことを伝えている。

セクストンはもともと教会の管理人を指す言葉であったが、中世初期、教会あるいは教会付設の墓地に死者を埋葬する習慣が生じたときに、彼らが鐘を鳴らしたり、墓を掘ったりする仕事を請け負うようになったことで、墓堀人としての意味が加わった。

アメリカでは、ヨーロッパと事情が異なり、例えばニューイングランドでは教会 (ミーティングハウス) と墓地は通常異なる管理下に置かれていたことや、19世紀前半に墓地改革で教会に属さない新しいタイプの田園墓地が誕生したことにより、教会と墓地は必ずしも一体化していなかった。それでも、教会と結びついた埋葬の習慣は19世紀になっても広範囲に残っており、教会に属するセクストンの仕事は存在した。さらにヨーロッパと大きく異なる点は、アメリカでは、埋葬の法律が完備されていなかったことや、墓地の規模が拡大することによってそれに関わる業務も広がったこと、ビジネスへの志向があったことなどで、セクストンの仕事の機会が、鐘を鳴らすことや墓堀りに加え、遺体の安置や、葬列の「付添い」や「指揮」、後にはアンダーテイカーに葬儀用品を販売する仕事へと広がったこ

とがあげられる²³⁾。とくに、ニューヨーク市においては、教会に属するセクストンが葬儀も執り行っていたので、初期のアンダーテイカーの組織は、彼らセクストン・アンダーテイカーと、ほぼ専業のアンダーテイカーとの間の利害を調整する役割を担っていた²⁴⁾。

一方、「アンダーテイカー」が、葬儀用具やサービスの提供者の意味で初めてアメリカの新聞に登場するのは、植民地時代の1768年であるという²⁵⁾。しかし、初期の段階では、彼らは迷子の子供の搜索から抜歯まで何でも「請け負って (undertake)」おり、葬儀を一手に引き受けるようになるのはずっと後のことである。セクストンからアンダーテイカーになったり、アンダーテイカーをしながらセクストンの仕事をしたり²⁶⁾、その仕事自体に優劣があったとは考えづらい。「セクストン」だけに、陰鬱で古くさいイメージを与えるのはフェアではないのだ。

『キャスケット』誌は、再び一面の最後のコラムで、「セクストン」に触れている。彼らのイメージは、「褐色の、日に焼けた、ごちなく、動作の鈍い雑役夫。コフィン造りから、墓堀り、そして最後の悲しい儀式に至るまで、当時としては大目に見られていたやり方で——現在では葬儀がシステムチックに提供している——執り行う人間」²⁷⁾と描写されている。ホーソーンの「なつかしき故郷」の中でも、イギリスのセクストンは、際立った性格描写もなく、目立たない存在として登場している。

『キャスケット』誌は、セクストンの仕事を蔑んでいる訳ではないがと断りながら、それでも過去10年から15年の間に時代は大きく変わり、「近代的なアンダーテイカー」(文中で強調されている)を必要とするようになったのだと説明されている。そのような需要が創出されたのは、都市ばかりでなく田舎の町でも美的なセンスが育まれたからだという。これは恐らく、発行地ロチェスターのマウント・ホープ霊園のような審美的目的も兼ねて設立された^{ル-ラル・セメタリー}田園墓地や庭園墓地と呼ばれる霊園が郊外の田舎の地に誕生したことを指しているのだろう。そのような霊園が、都市に公園

や美術館ができる前に人々の審美的意識を高めることに大いに貢献したからである。

いずれにしても、アンダーテイカーの前身をセクストンだけに帰するのは、ハーベンスタインも指摘しているように²⁸⁾、歴史的に正しいとは言えない。役所の役人が葬儀を執り行う場合もあったし、家具職人など葬儀用具を制作する人間が、葬儀を請け負うこともあり、独立した職業として確立する以前は、多様な分野の人間が「必要に応じて」死者のケアを行って来たからである。

これもやはり、「アンダーテイカー」を現代的な職業に引き上げるために、あえて「セクストン」と分離して、こちらの側に歴史的負荷を負わせるための巧妙なレトリックと考えてよいだろう。さらには、「セクストン」の言葉の中に、葬り去るべき古いヨーロッパやイギリスも代表させたのかもしれない。

ロチェスターが選ばれた理由

『サニーサイド』誌の誕生がニューヨーク市であるのに対し、『キャスケット』誌がなぜニューヨーク州のロチェスター市で発行されたのか、次にこの点について考えたい。ロチェスターは、ニューヨーク州の北西部、オンタリオ湖岸に位置し、1870年当時人口62,000人の州内で5番目に大きな都市であった。5番目といっても、ニューヨーク市にまだ統合されていないブルックリン市が入っているので、実質的には、ニューヨーク、バッファロー、オールバニーに続く4番目に大きな都市で、すぐにオールバニーを抜いて、3番目の大都市となるのである。1825年のエリー運河完成によって、急成長したブーミング・シティの1つである。開通前は、千人にも満たない辺境の地であったものが、運河の開通で西部とニューヨークを結

ぶ重要な拠点となった。急激な都市化を体験し、19世紀の墓地改革によって生まれた田園墓地を州内のどの都市にも先駆けて早々と設立した（マウント・ホープ霊園）革新的な都市である²⁹⁾。

それにしても、なぜロチェスターなのか『キャスケット』誌もよく質問されていたようで、創刊号ではその理由を5つあげ、あえて説明を行っている。第1に、葬儀業界でよく知られた2つの製造会社がここを本拠地としており、本誌発行のために多くの資金提供があったこと。2番目に、革新的な考え方のアンダーテイカーたちがいたこと。彼らは、時代に敏感で、厳かな葬儀を執り行う為に役立つアイデアや器具の導入にやぶさかではなかった。さらに、彼らの近代的な施設は、起業家精神に富んだアンダーテイカーたちのモデルにもなりえるものであること。3番目の理由は、国内でも、もっともエレガントで、管理が行き届き、最大規模の墓園のひとつ、マウント・ホープがロチェスターにあり、その近くに本拠地を置きたかったこと。これはかなり大きな理由だったと述べられている。4番目に、ロチェスターにはすばらしい記念碑を制作する職人たちがいること。彼らが造った見事な記念碑を見れば、ロチェスターの市民が高い芸術的センスをもっていることがうかがえる。5番目に、ジャーナリストとして、新規な企てにどの場所が適しているか検討した結果の選択だったこと。ロチェスターは、事業を立ち上げるのに必要な資金的援助を地元企業から得られるメリットがある。しかし、これは初期のメリットであって、後々の目的、全国のアンダーテイカーのプロフェッショナルな関心を追求することを考えた場合、指導的な立場のアンダーテイカーや、墓地管理者などから取材できる環境が整っていること、独特なスタイルの説明的な文章を送ってくる巡回通信員（traveling correspondence）とは異なる取材ソースがあることが述べられている。

最初の理由として述べられているように、『キャスケット』誌は、ロチェスターを本拠地とする棺と葬儀用馬車を製造する会社から大きな財政的

支援を得ている。STEIN・PATENT・BERIAL・CASKET・WORKSと、JAMES・CANNING・AND・SON・COMPANYである。創刊号では、前者の設立者で発明家のSAMUEL・STEIN（1851年にドイツから移民して成功したセルフメイドマン）の伝記を載せている。実は、発行者のナードリンガーは、STEINの棺会社の共同パートナーであったことが判明するのだが、これについては後に触れたい。棺と葬儀用馬車は、葬儀産業の2つの大きな柱である。とくに後者は、馬車から自動車へと事業拡大が今後期待される、きわめて有望なビジネスであった。このような地元企業がスポンサーとなり、年間の購読料1ドルのところを、初年度は——5月と9月の2回発行——無料で全国のヒューネラル・ディレクターに配布されると創刊号では述べられている³⁰⁾。

STEIN・PATENT・BERIAL・CASKET・WORKSでは、1875年——『CASKET』創刊の1年前——斬新な棺のカタログを発行している。大人は黒、子供は白という伝統的な布の色に加え、ロイヤル・パープルやアニリン・ブルー、ラベンダー色や、金、銀、黒エナメルの飾りやトリムなどカラーバリエーションを加えたものである。これまで伝統や慣習の領域にとどまっていた葬儀に、ファッションや趣味がこの時代に侵入し始めたことを示している³¹⁾。カタログを通じての棺の注文は、テクノロジーの進歩——遺体保存と通信および運搬手段——にも助けられた。注文を受けたアンダーテイカーは、すぐさま電報を製造元に打つ。在庫があれば棺は直ちに梱包され、工場や倉庫から搬出される。ロチェスターのSTEINの工場からニューヨーク市には、電報を打ってから20時間、シカゴへは30時間で棺は到着した。1876年に、STEINは電報による注文で、3,000以上の棺を販売したとされる³²⁾。

もう一方のJAMES・CANNING・SONは、1838年にロチェスターで設立された葬儀用馬車の製造会社である。葬儀用馬車製造においてもファッションが影響を与え始めたようで、何十年も変化しなかったスタイルに

1860年代から変化が現れ始め、約15年サイクルでスタイルが変わるようになったという³³⁾。その15年サイクルはシティ・ディレクトリーに掲載された広告を分析してはじき出された数字であるとし、そのサイクルがなぜ生じるかという解説が『サニーサイド』誌に掲載されている³⁴⁾。

ジェイムズ・カニングラム・サン・アンド・カンパニーは、南北戦争後の子供の棺の需要に注目し、白い美しい馬車を発売して大きな成功を収め、また1884年のニューオーリンズ産業綿花百年記念万国博覧会では、これまでのスタイルとはまったく異なる馬車を展示するなど革新的なメーカーであった³⁵⁾。

創刊者アルバート・H・ナードリンガー

ここで、『キャスケット』誌の発行者で編集者のアルバート・H・ナードリンガーについて記しておきたい（図版1）。葬儀業界誌自体について書かれたものが少ない中、発行者のナードリンガーの情報を得ることはきわめて困難であった。ヒューネラル・ディレクターの全国組織 NFDA (National Funeral Directors Association) を立ち上げるのに、業界誌が重要な役割を担ったことは認められるところで、発足当時の NFDA の議事録にも、その功労者としてアルバート・H・ナードリンガーと、同じく『キャスケット』誌共同編集者のトーマス・グリドン (Thomas Gliddon, 1832-



図版1 アルバート・ナードリンガー
(*The Casket*, January 1886より)

1890)の名が記されている³⁶⁾。『キャスケット』誌は、葬儀業界の指導者たちの伝記を第1面に掲載するシリーズを設け40名以上をとりあげている。そのお陰でわれわれは初期の主要アンダーテイカーたちについてかなり詳しく知ることができる。しかし、葬儀業界の組織化や葬儀業者間のコミュニケーション促進に深く関わった編集者たちについては百周年記念号においても、言及されていない。

まず手始めに、ロチェスターのシティ・ダイレクトリーを調べることにした。アメリカのシティ・ダイレクトリーは、都市住人の職業や住所等を記録する重要な歴史資料である。ロチェスターのディレクトリーは、モンロー・カウンティ・ライブラリーのオンライン・システムで、1820年代から1930年代まで見ることができる³⁷⁾。『キャスケット』誌出版の年、1876年から調べてみると、彼の名前が見つかり、ステイン・マニユファクチャリング・カンパニーと記されていた。『キャスケット』誌のスポンサー会社との関わりがこれから分かった。出版から10年の1886年に初めて、ナードリンガー・A・H・アンド・カンパニーとなり、『キャスケット』誌の出版者であることが記載され始めた。翌年の1887年から、妻テレサ(Theresa Nirdlinger, 1856-1909)の名前も併記されるようになる。それが、91年になると、妻だけの名前となり、どうもこの年か、前年アルバートが死亡したのではないかと推測された。しかし、アルバートは実際にこれよりも7年前の1884年に亡くなっていた事が後に判明する。『アメリカの雑誌の歴史』で述べられているように³⁸⁾、彼の死後は、妻に引き継がれ、その後は義理の息子(テレサの前夫との間に生まれた子供)シメオン・ワイル(Simeon Wile, 1875-1928)に引き継がれて、発行が継続されたことがディレクトリーでも確かめられた。夫の死後出版を引き継いだテレサは、1909年12月7日53歳で死亡していた。アルバート自身は、1870年からディレクトリーに登場し、そのときには事務員、セールスマンを経て出版者になったことが記録されていた。

シティ・ダイレクターは、氏名、職業、住所という限られた情報であるが、ナードリンガーがロチェスターの都市の中でどのような足跡を残したかを鮮明に伝えていた。しかし、アルバートはいったいどこで生まれて、どのようなバックグラウンドをもった人間なのだろうか。さらに調査を進めたところ、ナードリンガー一族について詳しく調べていたアルバートのいとこの孫にあたる女性と連絡を取ることができた。そして、発行人のアルバートについてさらに詳しい情報を得ることができた³⁹⁾。

提供された情報をもとにナードリンガー家とアルバートについてまとめてみると、次のようになる。ナードリンガー家は、もともとドイツのヘッピンゲン出身で、1830年代にアメリカにやってきたドイツ系ユダヤ人である。アメリカに住むナードリンガーを名乗る人たちは、このとき移民して来た兄弟2人（その1人がアルバートの父親）の子孫だそうだ。兄弟は、ペンシルヴァニア州のフィラデルフィアからアラバマ州のハンツヴィル、そしてインディアナ州のフォート・ウェインへと移住した。ペンシルヴァニアで資金を貯め、それを元手に新天地で運を試すため、南部の町ハンツヴィルに移住し、ドライ・グッズ（衣類や小間物）の店を開いた。1840年代のハンツヴィルは、テネシー川を走る蒸気船の主要な発着地として大変栄えていた。この地で1845年アルバートが生まれている（10人兄弟の最年長）。彼らの商売は繁盛していたようであったが、町の人口の半分以上が奴隷であるなど特殊な事情が彼らの生活に影響を与え始め、北部のインディアナ州に移住する決断をした。1歳にも満たないアルバートはこうしてフォート・ウェインにやってきた。ハンツヴィルからフォート・ウェインまでは、テネシー川がオハイオ川とつながっているのので、蒸気船に商品を積んで移動することが可能で、道中で商売を続けながら移動したことも考えられるという。到着するとさっそく衣類店近日開店の広告を出し、商売を始めている。その店は、「ニ・ュー・ヨ・ーク・ド・ライ・グ・ズ・エン・ポ・リアム」（強調筆者）と命名され、広告には、「フ・ァ・ッ・シ・ョ・ン・の・殿・堂」（Hall of Fashion）

と宣伝されていた⁴⁰⁾。広告、口コミ、低価格が功をなし、成長する町で小売りの顧客とともに、さらに西部の奥地へと向かう行商人も卸売りの顧客として取り込み、商売が繁盛したようだ。裕福な商人として成功したナードリンガー家のこのような商売の環境が、アルバートのビジネスセンス、広告への関心を育んだことは間違いないだろう。

アルバート自身はというと、16歳から19歳までは父親の衣料品店を手伝い、その後セントルイスで宝飾品のセールスマンを経験し、フォート・ウェインに戻って父親から独立し自身の衣料品の店を開いている。平行して、さまざまな試みも行っていたようで、棺の特許をとることや、1880年には、フォート・ウェインに最初のオペラハウスの建設も計画していた⁴¹⁾。

1870年頃（この年からロチェスターのシティ・ディレクトリーに名前がでてくる）アルバートはフォート・ウェインよりさらに北東に位置し、急成長していたロチェスターに移り住んだようだ。ここで、ディレクトリーにもあったように、事務員（ステイン・キャスケット・ワークスの事務員であることが、先の情報提供によって明らかとなる）から、このメーカーのパートナーとなって、ステイン・キャスケット・ワークス（後にマニュファクチャリング・カンパニーとなる）を設立し、さらには『キャスケット』誌の出版事業を立ち上げるまでになった。出版事業が成功を収めたために、1880年にステイン・マニュファクチャリングのパートナーシップをやむなく解消することになった。『キャスケット』誌が掲載する他の棺メーカーの広告と利害が衝突すると見なされたからである⁴²⁾。遺体を保存する技術も教えていたようで、その関係で『アンダーティカーズ・マニュアル』と題するエンバーミングの著名な指導者オーガスト・ルヌーアルの本も出版している⁴³⁾。

多角的なビジネスで成功を収めていた人生の最盛期、1884年10月21日アルバートは、39歳の短い人生に突然終止符を打った。彼の死亡記事は死因を腸炎（虫垂炎の意味）であるとしている⁴⁴⁾。病気の兆候を詳しく調べた

情報提供者のガービノ氏は、おそらく彼が使っていた遺体保存用（エンバミング溶液）のヒ素が原因ではないかと考えている。

アルバートの死後出版を引き継いだのは、先にもあげた妻のテレサである（図版2）。死亡する2年前の1882年3月1日、アルバートは、元宝石商の妻で、若い未亡人テレサ・ハンバーガー・ワイルと結婚しており、彼女には前述したように前夫との間に息子が1人いて、この義理の息子が、母親の死後、『キャスケット』誌の出版を引き継いだ。テレサは夫の死後、健康を害するまで12年間出版事業を経営した。彼女は「強い個性をもち、稀な才能に恵まれ、優れた判断力と、傑出したビジネスの能力をもち、業界誌の世界で、とくに彼女が専門とする分野で、よく知られ、よい評判を得ていた」と死亡告知の記事では述べられている⁴⁵⁾。しかし、出版継続の重圧は彼女の健康を損なわせることにもなったようだ。アルバートのパー



図版2 テレサ・ナードリンガー
(*The Sunnyside*, December 15, 1909より)

トナーであった『キャスケット』誌の編集者トーマス・グリドンが1890年に57歳で死亡すると、彼の後継者探しをしながらの出版事業継続は大きな負担となり、健康を害し、ノイローゼ寸前であったと後継者となった記者は書いている⁴⁶⁾。女性1人で出版事業を継続させることは簡単ではなかったろう。死因は結核だった。『キャスケット』誌の出版地をニューヨーク市に移転することを報じた1914年の地元紙は、彼女を「出版事業で成功した全国でも数少ない女性の1人」と評している⁴⁷⁾。

共同編集者トーマス・グリドン

ここで、アルバートの死後『キャスケット』誌の発行を継続した編集者のトーマス・グリドンについて一言触れたい⁴⁸⁾。彼は、イギリスのチャンネル諸島、ガンジー島出身で1851年、18歳のときにアメリカに移住した。1860年には、後から移住した家族とともにロチェスターに住む。オハイオ州のシンシナティヤ、ペンシルヴァニア州のエリーで、出版事業、編集に携わっていた。その後は、フリーメイソンの編集者となり、『キャスケット』誌の編集にも関わるようになり、1878年1月から編集者として同誌に名前が登場するようになる。ヒューネラル・ディレクターの組織にも積極的に関わり、1884年6月4日の大会でスピーチをしたことが報じられている。また、1885年には、ニューヨーク・アンダーテイカーズ・アソシエーションの5年間の歩みを編さんしている⁴⁹⁾。1890年のグリドンの死亡記事では、彼が20年近く、ニューヨーク州のフリーメイソンの重要なポストを務め、皆から尊敬される人物であったと述べられている。どうも一風変わった面もあったようで、自分の死が近いことが分かると、自分自身の葬儀の為の細かい指示を自ら準備して、フリーメイソンのホールでそのように葬儀を執り行わせた⁵⁰⁾。遺体はマウント・ホープに埋葬された。グリドン

に関する新資料によって、彼もまた葬儀業ととくに関わりのない印刷業界の出身であることが分かり、このような専門的背景も『キャスケット』誌がジャーナリズムの世界で成功したひとつの理由であったろう。

文化人としてのナードリンガーとその一族

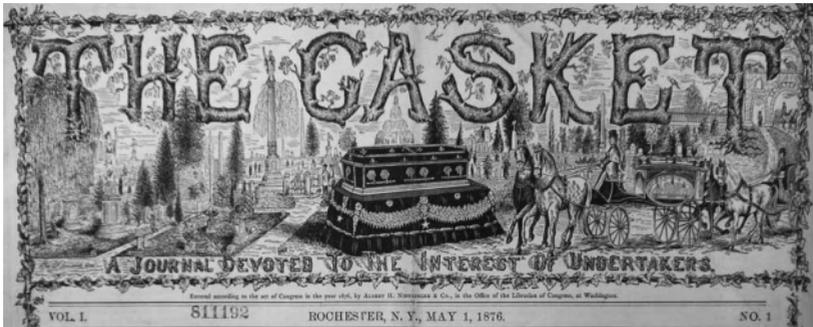
アルバート・ナードリンガーの人生を思いがけずに詳しくたどる事ができ、改めて『キャスケット』誌の質の高さ——20世紀後半に至るまで生き残ったことがその証ではないだろうか——が何に由来するものか理解できた。創刊者のナードリンガーは優れた発明家、出版者、ビジネスマン、広告マンであり、審美眼ももちあわせた文化人だった。1909年、義理の息子シメオン・ワイルの経営下で出版された12月号の魅力的なホリデイ・エディション（44頁の大判サイズ）を紹介した地元紙は、「上質紙に、最高のタイポグラフィ、2色刷りのすばらしい表紙、目次には・・・美しいハーフトーンのエングレーヴィングのイラストが施され・・・多くの魅力的な広告・・・」と、内容ばかりか、紙質やデザインの秀逸さをほめたたえている。これこそアルバートが目指したジャーナルの姿であったろう。この年になると、世界にも購読者を広げ、「もっとも優れた編集、もっとも有益で影響力のある業界誌」と報じられている⁵¹⁾。

新たなことに果敢に挑戦するアルバートの態度は、「空想家」(visionary)と見られる面もあったようだが、将来を予見する「ヴィジョン」なくして、新規な企てを成功させることはできなかったろう⁵²⁾。そして、彼のそのような資質は、アメリカで成功を取めたナードリンガー一族に帰することができるのである。アルバートの弟は、19世紀の有名な劇作家チャールズ・ナードリンガーであり、アルバートの妹の息子（甥）は、1824年にH・L・メンケンとともに有名な『アメリカン・マーキュリー』誌を立ち上げた、

文芸批評家ジョージ・J・ネイサンであった。アルバート、そしてナードリンガー家の物語は、新天地で運を試すべくヨーロッパから移住し、アメリカで富と地位を築いた、ドイツ系ユダヤ人移民の軌跡そのものであった。さらには、ニューヨーク、フィラデルフィアから、新たな機会を見いだすべく西部の奥地に移動した彼らの足跡は、運河、蒸気船、鉄道の発達歴史そのものである事も理解できたのである。

『キャスケット』誌のタイトル・デザインから読み取れること

次に、『キャスケット』誌に焦点を当てた考察に移りたい。今回の調査でもっとも重要な発見と筆者が考えるのは、『キャスケット』誌の初年度(2冊)と2年目に使われたタイトル・デザインの解釈である。創刊年と次年度に使われた図案(図版3)は、スペースを多くとり、人目を引く凝ったエングレイビングである。墓園風景を葬儀雑誌のデザインに取り入れることは、『シュラウド』誌や『アンダーテイカー』誌にも見られる⁵³⁾。それはエジプトやギリシャの風景であつたり(『サニーサイド』誌1913年

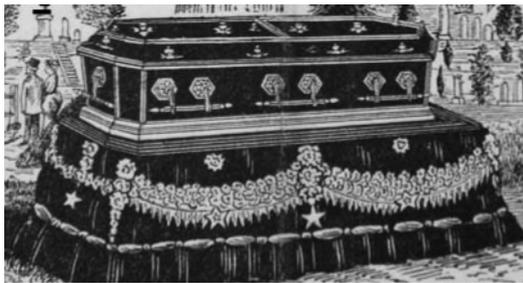


図版3 『キャスケット』誌創刊号のタイトルのデザイン
(*The Casket*, May 1, 1876より)

1月15日号)、途中で切れた石柱やオベリスクのモニュメントであったり(『シュラウド』誌1885年3月号)、抽象化された図案として、いずれもタイトルの左右の装飾として使われている。しかし、『キャスケット』誌の場合には、紙面の5分の1以上が使われ、キャスケットの文字自体も木の幹で描かれ墓園風景に溶け込んでいる。この業界誌を手にとった者は、まずこの図案に強い印象をもっただろう。

この絵を制作したのは、ジョージ・D・ラムズデル(Geo. D. Ramsdell)という、ロチェスターのデザイナー兼エングレーヴァーであることが、絵の左下に小さく書かれた署名から明らかとなった。ちょうど、『キャスケット』誌が創刊された年に、彼はロチェスターのシティ・ディレクターに大きな広告を載せていた。広告用図案をいろいろ手がけていたようで、彼が描いた靴の図案の復刻本が出版されている⁵⁴⁾。『キャスケット』誌は、ラムズデルが描いた葬儀用馬車や棺などの印刷用エレクトロタイプ(広告主が使うための図案)を宣伝、販売しており、絵の中心に描かれていた棺と同じ図案もあった(図版4, 5)⁵⁵⁾。初年度を飾った凝ったエングレーヴィングは、ラムズデルの図案作成者としての宣伝も兼ねていたことは大いにありえる⁵⁶⁾。

ここに描かれた風景が醸し出す雰囲気は、理性的でプロフェッショナル



図版4 絵の中央に描かれたキャスケット
(*The Casket*, May 1, 1876より)



図版5 図版4と同じ図案の印刷用エレクトロタイプ
 (The Casket Business Directory, Dec.25, 1886より)

な世界というよりも、有機的、物語的、女性的ですらある。なぜ、そのような雰囲気が生まれるのか、筆者が考える理由を2つあげたい。

1つは、ここに描かれている墓園風景が、抽象的なものではなく、具体的な風景であることに由来する。霊園の立派な門から馬車や人が入ってくる様子や高々とそびえるモニュメントや彫刻、それを眺める男女、墓の前のベンチに座る女性、大きな噴水、鳥の形をした小さな噴水もある。19世紀葬儀の重要なアイコン、柳の木も描かれ、中央には立派なキャスケット、右側には葬儀用馬車が描かれている。2つのスポンサーを代表するものだ。ここに描かれた墓園は、実際にロチェスターにあるマウント・ホープ霊園である。噴水は水の形からしてマウント・ホープのフィレンツェ噴水と思われる。これは『キャスケット』誌創刊の1年前、1875年に造られ、墓園の名所となった。もっとも決定的な証拠は、絵の中央、キャスケットの左側でひとときわ高くそびえるモニュメントである(図版6, 7)。これはH・カーヴァーと書かれているように、ハートウェル・カーヴァー(Hartwell Carver, 1789-1875)の記念碑である。彼は、パシフィック鉄道の父と呼ばれ、アメリカの東海岸と西海岸を鉄道で結ぶことを最初に提唱した人物として知られている。この高さ16メートルの記念碑は、ユニオンパシフィックから資金を得て、1782年に建てられている⁵⁷⁾。これで、このエングレー



図版6 絵の中のカーヴァーの碑
(*The Casket*, May 1, 1876より)



図版7 実際のカーヴァーの碑
(Wikipedia "Hartwell Carver"より)

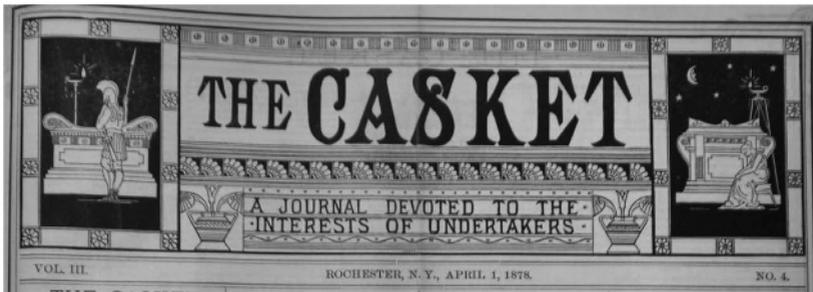
ヴィングが、マウント・ホープ霊園の風景であることは間違いない。

マウント・ホープ霊園は、ニューヨーク州に設立された最初の田園墓地であり、『キャスケット』誌がその美しい景観をほめたたえていた墓園である。絵に描かれたディテールに目を凝らしてみると、それぞれが物語を

語り始め、小宇宙が目の間に広がっていくような効果を生んでいる。そのために、プロフェッショナルな冷たい図案とは異なる親密な印象を与えている。この絵は、具体的なマウント・ホープであると同時に、本誌の読者の町にも必ずあるであろう美しい田園墓地すら想起させるのである。

もう1つの理由は、1つ目と関わるが、田園墓地が本来もっている資質と関係している。この点については、拙著『アメリカ田園墓地の研究——生と死の景観論——』（2000年、玉川大学出版部）で詳しく論じているので、ここで繰り返すことはしないが、田園墓地は、死を受けつけない男性的「進歩」観とは対極的な、死を取り込み再生産する有機的空間を作ろうと意図されていたので、どうしても、女性的な雰囲気や内在する傾向にある。また、田園墓地は文学が織り込まれた景観でもあるので、物語性ももっているのである。

この図版を使ったのは2年目までで、3年目からはよりシンプルで、抽象的な図柄となった（図版8）。なぜ変更したのか理由は分からないが、新たにトーマス・グリドンが編集者として加わっているのが、新体制をアピールする為であるかもしれない。こちらの方がよりプロフェッショナルで時代にあったデザインであることは間違いない。マウント・ホープは田園墓地普及の初期につくられた墓園だが、19世紀後半になると近代的な公



図版8 1878年1月号以降のタイトルのデザイン
(*The Casket*, January 1886より)

園風景観が登場するので、それ以前のメランコリーな墓園風景は古臭いと思われたのかもしれない。あるいは、商業志向の墓地の普及で、センチメンタルな田園墓地自体が古臭いと思われたのかもしれない。そのような理由に加え、筆者は、葬儀業界がプロフェッショナル化をはかるために、女性的なイメージをなるべく排除したいという意図が働いたのではないかと考えている。その後1890年代から『キャスケット』誌は葬儀用馬車・自動車の図案を表紙に使うようになり、男性的なイメージを30年近く継続して強調するからである。しかしながら、2年間だけとはいえ、有力葬儀業界誌が女性的、有機的な田園墓地のイメージでスタートした事実は、きわめて興味深い発見であり、この点をさらに掘り下げてみたい。

葬儀業界誌と田園墓地との関わり

『キャスケット』誌創刊号のエングレーヴィングは、これまで述べたように初期葬儀業界誌と田園墓地の関係に目を向ける機会を与えてくれた。ロチェスターを選択した理由の1つにマウント・ホープ霊園があげられていたことは筆者にとってやや意外なことであった。葬儀と墓地はもちろん緊密な関係にあるが、葬儀から埋葬まで一貫して葬儀業者が請け負うシステムが確立するのは、20世紀前半のフォレスト・ローン・メモリアル・パークの登場まで待たなくてはならない。葬儀と墓地はそれほど関係があるとは思われず、今回の葬儀業界誌研究の視界にも墓地は入っていなかった。しかし、このタイトル・デザインは、筆者にもう一度田園墓地がアメリカ社会・文化に与えた意義を再認識させることになった。『キャスケット』誌が述べているように、田舎の人間すら良い趣味、美的センスをもつようになったことに、田園墓地が果たした役割は大きいのである。都市に都市公園ができる以前に、美しくデザインされた英国風景庭園を市民に提供し

たのは、田園墓地であった。しかも、園内は美しいモニュメントや彫刻にあふれた野外美術館だった。墓地が美術館を目指した事は、拙論「19世紀後半における田園墓地の西部への進出——ピクチャレスクな景観の変容——」で論じた⁵⁸⁾。

死に美をもち込むことは、田園墓地がすでに実践していた。アメリカでは、美しい景観のなかで、死者が眠りにつく環境がすでに整っていたのである。生前はいかに立派な城を住まいとしても、一旦死んでしまえば陰気な教会のコフィンに入れられるイギリスの事情とは異なるのである。アメリカの死者は、生者と同様に広々とした芝生の広がる「家」でアメリカ式ライフスタイルを享受していたのである。アメリカで、その「美」にふさわしい死者への対応が求められるのは当然の結果ではないだろうか。セクストンイギリスの教会にはふさわしいが、アメリカの庭園墓地にはよりふさわしいケアテイカーが必要であろう。もう、古い（ヨーロッパ的な）慣習は完全に捨てて、実態にあった新しい葬儀を創造してもよいだろう。ナードリンガーも含めた葬儀業界が試みていたことは、マウント・ホープのような、美しい墓地にふさわしい新しい葬儀をつくりあげることだったのではないだろうか。

マウント・ホープが、急成長するロチェスターの風紀の乱れなど、悪化する都市生活の質の向上もその設立動機の背景にあったように、ナードリンガーの『キャスケット』誌出版も、彼が関わったオペラハウス建設やファッション事業と同じように、アメリカの都市生活における洗練された文化創造の試みだったのである。

ロチェスターからニューヨークへ

テレサ・ナードリンガーの死から4年半後の1914年6月に、『キャスケ

ット』誌はロチェスターからニューヨークに移った。ロチェスターでの38年間に渡る出版事業は、ロチェスターの名を広く知らしめたと、移転を報じた地元紙は悔やんでいる。ロチェスターで創刊され後にニューヨークに移りさらに大きく成功した『ルーラル・ニューヨーカー』誌や『コズモポリタン』誌の歩んだ道をたどるのだろうと述べている。移転の理由は、ビジネス拡大のためとシメオン・ワイルは述べているが、具体的には地元編集者のウィリアム・ミル・バトラー (William Mill Butler) と手を組み、ニューヨークの『サニーサイド』誌の経営権を獲得して同じ編集下で両雑誌を発行することになった為であった⁵⁹⁾。

その体制は11年間続き、創刊から50年目の1925年に両誌は合体して『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌となった。一本化後は、月2回の発売など積極的な販売体制を打ち出した。20世紀後半まで出版されたもつとも長い歴史をもつ葬儀業界誌となった。ニューヨーク移転後、20世紀初頭の本雑誌の展開については、誌面の都合上本論文では触れず別の機会としたい。

『キャスケット・アンド・サニーサイド』誌の活力が続いたのは1950年代くらいまでで、その後は経営破綻状態となった。雑誌の刊行も不定期になって、最後には季刊誌になり、1988年秋号をもって百年以上に渡る長い歴史にピリオドを打った⁶⁰⁾。

シメオン・ワイルはというと、1928年11月23日に53歳で亡くなっている。広告クラブ、プレス・クラブに属し、ニューヨーク郊外のスカースデイルに住み、カントリークラブのメンバーシップや、メトロポリタンオペラのボックス席をもっていた⁶¹⁾。ニューヨークでの文化生活を大いに楽しんでいただようだ。スカースデイルの邸宅は、彼の死後の1930年に、28万2,100ドル⁶²⁾、現在の価値に換算して382万4,700ドル (約3億円) の価値があったことが報じられているので、ビジネスマンとして成功し、裕福な生活を享受していたことがうかがえる。義父のようにオペラを楽しむ文化人であ

り、死後に邸宅の半分をロチェスターの2つの組織、フリーメイソンのロッジと、ユダヤ人孤児院へと寄付した慈善家でもあった。

まとめと今後の研究課題

今回の初期葬儀業界誌の研究では、とくに図像に注目することによって、葬儀業界誌が、19世紀前半から続く死のイコノグラフィー、死の文化を引き継いでいることが明らかになった。それは、審美的、有機的、女性的な死の解釈であるが、葬儀業界誌の出発点をここに認めることができたことは、きわめて意義深い発見であった。最も初期の雑誌が「ジョークの寄せ集め」と見なされていたイメージと、その後のビジネス、プロフェッショナルなイメージに徹するそのちょうど中間に埋もれていた事実を発掘することができた。

また、創刊者の一族からの思いがけない情報・資料提供によって、創刊者が発明家、起業家としての才能に恵まれ、広告を駆使した近代的なビジネスマンであり、また芸術にも関心の高い文化人であることが明らかになった。彼は、初期葬儀業界誌を、各地を旅する巡回通信員が提供する「ジョークの寄せ集め」ととられかねないイメージから、直接取材に基づいた信頼度の高い、読者の関心に応える雑誌とすることを目指した。『キャスト・アンド・サニーサイド』誌が、その後海外の購読者も獲得し、重要な葬儀業界誌へと大きく成長する基礎を築いたといえる。本研究で明らかになったことは、ジュシカ・ミットフォートに代表される外国人や、アメリカ人自身によってステレオタイプ化されたアメリカの葬儀に対する見方を、修正するものとなろう。アメリカ人の葬儀体験は、墓地の歴史も含めた、アメリカ社会、文化のより広い文脈のなかで、多面的な体験として理解されるべきものなのである。

今後の研究課題を何点かあげて、締めくくりとしたい。まず、本論で触れることができなかった、葬儀業界誌とヒューネラル・ディレクターの組織化、とくにNFDAとの関係について検討する必要があるだろう。葬儀業界がプロフェッショナル化を押し進める中で、男性的イメージを強化して行くプロセスを葬儀業界誌の誌面造りから分析し、ジェンダーとの関わりを考察することも今後の課題である。また、葬儀用自動車、レディメードの棺、ヒューネラル・ハウスやパーラーなど近代的葬儀を代表するテクノロジー、モノ、場など、人々の反発と受容という観点から、興味深い研究テーマとして展開することができ、現在それらについて執筆準備中である。今回は、19世紀後半の初期葬儀雑誌をとりあげたが、時代をさらに進めて20世紀後半まで広げ、長期的変化を読み取ることも今後の重要な研究課題である。

謝辞

本研究は、平成20年度専修大学研究助成「葬儀業界誌と一般誌から見たアメリカ人の葬送儀礼・死生観とライフスタイルとの関係」の研究成果の一部であり、平成23年度長期在外研究の機会を得て執筆できたことを付記し、専修大学に感謝の意を表したい。『キャスケット』誌の創刊者、共同編集者の子孫に当たるお二人の女性から情報・資料提供など多大なご協力をいただいた。ナンシー・ナードリンガー・ガービノ氏とモーリン・マックギー氏に深く感謝申し上げる。

注

- 1) 初期の業界誌は、雑誌というよりも、新聞と呼ぶ方が正しいが、本論文では、区別をせずに、一様に「誌」を使う。
- 2) Robert W. Habenstein, William M. Lamers, *The History of American Funeral Directing* (Milwaukee : Bulfin Printers, 1955), 478-480.
- 3) ウィスコンシン州のブルックフィールドにある、ナショナル・フューネラル・ディレクターズ・アソシエーション (NFDA) 専属の図書館が創刊号から揃えているようであるが、もっとも古い『アンダーテイカー』誌はない。ワシントン DC の議会図書館においても、不完全な形でしか収集されていない。ニューヨーク公共図書館には、『キャスケット』と『サニーサイド』の初期の年代のものが完全な形ではないが揃っている。本論文執筆では、ニューヨーク公共図書館を利用した。
- 4) 専修大学アメリカ研究 [http://www.isc.senshu-u.ac.jp/~thb0622/archivist.html]
- 5) *Casket and Sunnyside, Centennial Edition*, Vol. 101, No. 13, 1972, 2に引用。
- 6) Habenstein, 477に引用。
- 7) *Ibid.*, 479.
- 8) *Ibid.*
- 9) *Casket and Sunnyside, Centennial Edition*, 4に引用。
- 10) Habenstein, 478.
- 11) Frank Luther Mott, *A History of American Magazines, Volume III : 1865-1885* (Cambridge : Belknap Press of Harvard University Press, 1938), 131.
- 12) “Salutatory,” *The Casket*, May 1, Vol. 1, No. 1, 1876, 1.
- 13) Habenstein, 478.
- 14) *Ibid.*, 270-1.
- 15) *Ibid.*, 274.
- 16) 例えば、ウェブ上で *casket* と *coffin* の違いについて、以下のような質問とそれに対する答えが載せられている。“What is the Difference between a Casket and a Coffin?”
[http://www.wisegeek.com/what-is-the-difference-between-a-casket-and-a-coffin.htm] (2011. 11. 14).
- 17) Habenstein, 274.
- 18) “Casket” in 1911 edition of *Encyclopedia Britannica*, online version.
[http://www.1911encyclopedia.org/Casket] (2011. 11. 12).
- 19) *Casket and Sunnyside, Centennial Edition*, Vol. 101, No. 13, 1972.
- 20) H. L. Mencken, *The American Language*, abridged and revised by Raven I. McDavid, Jr. and David W. Maurer (New York : Alfred A. Knopf, 1963), 341に引用。
- 21) *The American Language : A Preliminary Inquiry into the Development of English in the United States* (New York : Casimo Classics, 2010), 147.

- 22) *The American Language*, 1968, 341.
- 23) Habenstein, 239.
- 24) *Ibid* , , 458.
- 25) *Ibid* . , 169.
- 26) *Ibid* . , 239-40.
- 27) *The Casket*, May 1, 1876, Vol. 1, No. 1, 1.
- 28) Habenstein, 479.
- 29) David Charles Sloane, *The Last Great Necessity: Cemeteries in American History* (Baltimore and London : The Johns Hopkins University Press, 1991) , 57-8.
- 30) *The Casket*, Vol. 1, No. 1, May 1 , 1876, 1.
- 31) Habenstein, 401.
- 32) *Ibid* . , 401-2.
- 33) *Ibid* . , 360.
- 34) “Concerning the Evolution of Styles in Hearses,” *Sunnyside*, March 15, 1913, 14-15, Habenstein, 363にも引用されている。
- 35) Habenstein, 365, 367.
- 36) *Ibid* . , 459.
- 37) Rochester City Directories, Monroe County Library System. [<http://www3.libraryweb.org/lh.aspx?id=1104>] (2011. 11. 20).
- 38) Mott, 131.
- 39) 情報・資料提供していただいた Nancy Nirdlinger Gerbino 氏に深く感謝したい。これ以降のアルバートに関する記述は、彼女の情報に基づくものである。
- 40) *Fort Wayne Sentinel*, March 9, 1846に掲載された店の広告。
- 41) “The New Opera House,” *Fort Wayne Daily Gazette*, September 6, 1883, 6.
- 42) Nancy Nirdlinger Gerbino 氏からの情報提供。
- 43) Auguste Renouar, *The Undertakers’ Manual : A Treatise of Useful and Reliable Information ; Embracing Complete and Detailed Instructions for the Preservations of the Bodies. Also, the most Approved Embalming Method : With Hints on Hints on the Profession of Undertaking* (Rochester, N.Y. : A. H. Nirdlinger & Co, Publishers, 1878) .
- 44) “Death of Albert Nirdlinger,” *Fort Wayne Daily News*, October 22, 1884.
- 45) “Attractive Rochester Journal. The Holiday Edition of ‘The Casket’ Commands Attention.” *Rochester Democrat and Chronicle*, Sunday, December 19, 1909.
- 46) “Mrs. Theresa A. Nirdlinger,” *The Sunnyside*, December 15, 1909, 37-38.
- 47) “Rochester To Lose Old Trade Journal. Casket Will Be Published in New York,” *Rochester Democrat And Chronicle*, Sunday, June 7, 1914, 30.
- 48) これ以降の Thomas Gliddon に関する情報は、彼の母方の子孫に当たる、Maureen McGee 氏から提供されたものである。彼女に感謝したい。

- 49) *Rochester Democrat and Chronicle*, May 26, 1885の記事。McGee氏からの提供。
- 50) *The Syracuse Standard*, June 15, 1890の記事。McGee氏からの提供。
- 51) *Rochester Democrat and Chronicle*, Sunday, December 19, 1909.
- 52) アルバートの死を告げる『キャスケット』誌で述べられている言葉。“A sad termination. A death of Albert H. Nirdlinger, Projector and Publisher of “The Casket,” *The Casket*, Vol. IX, No. 11, November 1884.
- 53) Habensterin, 486, 487の図版68, 69参照。
- 54) Geo. D. Ramsdell, *3000 Shoes from 1896: With Price Guide* (New York; Schiffer Pub Ltd, 1998)
- 55) *Casket Business Directory; Issued for Manufactures, Jobbers, Dealers and Funeral Directors*, Corrected Dec. 25, 1886, Complements of A. H. Nirdlinger & Co., 18の広告や、『キャスケット』誌内にも創刊号から掲載されている。
- 56) これに最初に気づかせてくれたのはガービノ氏である。
- 57) Dr. Hartwell Carver Obituary, *The New York Times*, April 19, 1875.
- 58) 黒沢眞里子「19世紀後半における田園墓地の西部への進出——ピクチャレスクな景観の変容」『専修人文論集』72, 2003年03月01日: 337-359.
- 59) “Rochester To Lose Old Trade Journal. Casket Will Be Published in New York,” *op. cit.*
- 60) Mark A. Newman, “A great one remembered... : CASKET AND SUNNYSIDE,” *The Folio: The Magazine for Magazine Management*, April 1, 2003.
[http://findarticles.com/p/articles/mi_m3065/is_4_32/ai_99261705/] (2011. 11. 6)
- 61) “Simon Wile,” *The New York Times*, Nov 24, 1928, 11.
- 62) “Scarsdale Man Leaves Sum to Elks, Orphans,” *Rochester Democrat and Chronicle*, June 17, 1930, 22.